

第5回愛と義のまち米沢エッセイコンテスト受賞作品

金 賞

「扉をひらいて」 埼玉県 齋藤典子

浦和駅東口へ続くバス通りから脇に一本逸れた道に、内科小児科のN医院はあった。父の代からお世話になっていたホームドクターだ。30年以上前の初夏のある日、25歳の新米ママだった私は、熱を出した3ヶ月の長男を連れて行った。

N医院はこぢんまりした造りで、待合室には私と息子だけだった。すると、玄関の引き戸がガラガラッと開いて、私より一回りほど歳上の女性の顔が見えた。しかし、女性は玄関を開けっ放しにしたまま去ってしまい、私は戸惑った。閉めた方がよいか、と思い始めた時、女性は戻って来た。腕に6歳位の大きさの女の子を抱えて。女の子の頭や手足は上げた箇所があり、本当は幾つなのか、6歳より幼いのか中学生位なのか見当がつかなかった。ただ、重い障がいがあり寝たきりで、先に医院の玄関を開けておかなければ、入って来ることが難しかったのは容易に知れた。お母さんは娘さんを長椅子に横たえさせて、ふうーっと大きく息をついたが、辛そうな素振りはなかった。優しく娘さんの髪を撫でていた。

息子の名前が呼ばれた。抱いて診察室に入ろうと立ち上がった時だ。そのお母さんがサッと立って、診察室のドアを開けてくれた。まるで自動ドアのように。「ありがとうございます」頭を下げた私にも、まるくて爽やかな笑顔を向けて。

あのお母さんは、どれだけ、扉を開けて欲しいと願って生きてきたことだろう。

私は息子の3年後に長女を出産した。小さく生まれ自閉の障がいがあった。また別の意味合いで、扉を開けておかなければならないこと、開けて欲しいことが沢山あった。

両親もこの世を去った。時間外でも嫌な顔をせず診て下さったN先生も亡くなられてから久しい。医院の前を通ることも滅多になくなった。それでも、あの日のあのお母さんの親切は、日に日に重みを増して、一つの教えとして私の中に残っている。

銀 賞

「五円」 香川県 太田貴子

警察署から電話があった。

財布を預かっているのとりに来てほしいとのこと。私は、はっとしてかばんの中を見た。財布を落としたことにさえ気がついていなかった。

すぐに警察署の落とし物課へ駆けつけた。財布を受け取ると、いそいで中身を確認した。お金が減っていないか、免許証やクレジットカードが盗まれていないか、なによりそれが心配だった。

お札を数えてホッと、カードが定位置にあるのを確認して、深呼吸した。

帰宅すると、コインくらいは盗まれていても仕方ないか、と思いながらコイン入れをのぞいた。すると金銀に光るものがある。手にとってよく見ていると、五円玉が結ばれた水引だった。私はその美しさに見とれた。ちいさな紙切れもコインにまぎれて入っており、そこには『あなた様に、すばらしい「ご縁」がありますように』と綴られていた。

私は五円が結ばれた水引とメッセージが書かれた紙切れをにぎりしめた。それを頬に近づけると涙が溢れた。財布を預かっていると電話をもらった瞬間から、私はただ疑うことしかしなかった。そんな自分が恥ずかしかった。

財布を落とした時間帯にも、自分のことだけを考えぼんやりと歩いていたように思う。だから財布を落としたことにも気づけなかったのだろう。

思えば、あのころの私は「ひと」に対し、常に不信感を抱いていた。だまされるのではないか、裏切られるのではないか、この優しさは偽りではないのか、と。そしてそんな現実を作りだしていたのは、ほかでもない私の心だった。

水引に結ばれた五円玉は、結び目が切れた後も大切に取っていたが、今年初詣に行った際、お賽銭にしようと決意した。

財布を拾い、水引とメッセージを残してくれた見知らぬひとに、そっとお札をいった。

賽銭箱におさめる直前にじっくりと五円玉を見つめた。昭和 50 年。私が生まれた年に作られた五円だった。

ご縁を失うようで、私はその貴重な五円玉をおさめることができなかった。

「この街に支えてもらいながら」 山形県 島倉真澄

秋、2ヶ月の息子と里帰りを終え、米沢のアパートに戻ってきた。初めての赤ちゃんとのほのぼのした日々を楽しみにしていたのだが、産んでからの毎日は想像以上に大変だった。我が子はもちろんかわいい。しかし、だっこしても顔を真っ赤にして泣きわめく息子に、こちらが泣きたくなったりイライラすることもあり、「ダメな母親だ。」「アパートで育児と家事を両立できるかな。」と自己嫌悪と不安の中で、1ヶ月の予定だった里帰りをずるずるとのばしてしまった。

育休をいただき、我が子と一緒に過ごせるのは幸せなことだ。でも、どこへ行くのにも二人セットなのは大変。スーパーへの買い物も、チャイルドシートやだっこ紐につけ替える度、ぐずることを考えると気が重い。泣き出したら周りの目も気になって買い物どころではなくなると思うと一層腰が重い。スーパーデビューの日、会計を終えると案の定ぐずり出した。慌てて袋づめしていると、泣き声はおさまり、息子は窓の外をじっと見ている。見ず知らずの男性が柱から顔を出したりひっこめたりして息子をあやしてくれていたのだ。帰り際、礼を言うと、「気をつけてな。」と返ってきた。その言葉にじんわりと心が温かくなって気持ちが軽くなった気がした。

1月。初めてもらったお年玉を手に、息子の口座を作ろうと銀行へ行った。息子を抱きかかえてあやしながら書類を書いていると、窓口の女性が、「差し支えなければ抱っこしますよ。」と声をかけてくれた。書類を書いている間、息子はカウンターの中で抱っこされてご機嫌だった。出来あがった通帳には、その女性のお陰で温かい思い出がプラスされた。息子を産んでから、地域の方のこうしたさりげない親切を本当にありがたく感じている。

初めての子育ては不安と戸惑いだらけだ。でも、なんとかやっていけそうだ。この街の人の“優しさ” “愛”に支えてもらいながら。

「言葉を越えた出会い」 神奈川県 中島 彰

僕は去年、妻と上海旅行へ出かけました。新婚間もない旅行ということもあり、僕たちははしゃいでいて、とても楽しい時間を過ごしていました。ところが、そんな2日目の夜、上海雑技団の公演を見終えてホテルへ帰る途中、僕は財布をなくしていることに気がつきました。パニックになりながら、とりあえず雑技団の公演会場に戻ってみたものの、すでに会場は閉まっており、中にすら入れない状態でした。初めての海外旅行、まったく土地勘のない街で、僕たちは途方に暮れてしまいました。

そこへ、一人の中国人女性が近づいてきました。僕たちは藁にもすがる思いで、彼女に財布をなくしたことを身振り手振りで伝えようと思いました。彼女は、そんな僕らの必死な動きから何かを感じたのか、明日の同じ時間にこの場所に来いというジェスチャーをして去って行きました。僕たちは半信半疑のまま、その日はホテルに戻り、翌日また同じ時間に同じ場所に行ってみました。すると、昨日の彼女が現れ、なんと僕の財布を手渡してくれました。驚いた僕は、なぜ彼女が財布を持っているか分からないという素振りをすると、僕たちにもわかるような動きで、雑技団に連絡し、忘れ物管理所に保管されていた財布を電車に乗って取りに行った、と伝えてくれました。出会ったばかりの見ず知らずの外国人に、さらに言葉も通じないにもかかわらず、なんて親切な方なんだろうと感動してしまいました。僕らは抱き合い、感謝の意を伝えて別れました。おかげで、その後の旅行も存分に楽しむことができました。

普段、なにげないニュースの中で、中国や中国人のことをなんとなく敬遠していた僕は、会ったこともない人たちを一括りに否定してしまっていたことを恥じました。そして、たとえ言葉が通じなくとも、心の通った人間であれば、助け合うことができるということ学びました。いつか彼女のように、どこかで困っている中国人がいれば、恩返しをしたいなと思っています。

銅 賞

「若草色の優しさ」 埼玉県 上森美紀

私は背が低い。一五三センチあるかないかといったところ、そんなミニマムな私が転職をした。

新しい職場のルールの一つに自分の蛍光灯の管理というものがあった。それは昼食時と退社時には必ず自分にあてがわれた蛍光灯を消すという事だった。内容は単純なのだが私には少々やっかいなルールだった。それというのもその蛍光灯は引っ張る紐が短いのかそれとも机の配置のせいなのか、はたまた私の背が低いせいなのかは分からないが、つんのめるようになりながら手を伸ばしても紐に手が届かないのだ。靴を脱いで椅子に上がり手を伸ばしてもあともうちょっとというところで紐はぶらぶらとしている。しょうがなく私はデスクによじ登り毎昼毎晩蛍光灯を消していたのだった。

本当はみっともなくなってしまうけれどもこの紐の先に新しい紐を結んで長さを足したいと思ったが、この蛍光灯にもそんな紐の延長は見られず、そもそも入社したての新米がそんな勝手な事をして白い目で見られたらどうしようと思い、何か行動を起こすことが出来なかった。

仕事にも段々慣れて来たある月曜日、職場に着いて靴を脱ぎ椅子に乗ってから机に手をかけ、ふっと紐を見上げると見慣れた紐の先に綺麗な若草色の細いリボンが結んであった。思わず溜め息が漏れた。誰かが私の為にこれをしてくれた。

椅子から下りて手を伸ばすと何の不自由も無く蛍光灯をつけたり消したり出来る。まさかこんな昭和の子供部屋みたいなことを許してくれて、なおかつやってくれるなんて。嬉しい、何て嬉しい。

「このリボンを付けて下さったのはどなたですか」

部屋中に聞いてみると皆くすくす笑っていて、さあ誰だろうねえとあちこちから聞こえてきた。結局誰が発案して結んでくれたのかはわからずじまいだったが、このリボンを機に一気に私は新しい職場になじむ事が出来た。あれから何年も経ったが今も私は若草色のリボンを引っ張るたびに優しい気持ちになる。

「島根の光」 埼玉県 邱 力萍

日本語を覚え1年後、娘が生まれた。その3ヶ月後の朝、突然鼻から大量の出血があった。疲れからだと思っていたら、鼻の裏に腫瘍があると検査で分かった。すぐに手術し、悪性について調べる必要があると先生は主人を呼んで話したことを聞き、魂が抜かれたように私は茫然となった。

私が15歳の時に母がガンで亡くなり、その辛さは誰よりも体感した。もし今私の身に何かあったら、腕に抱えていた娘はきっと私以上に寂しい思いをすると考えると、恐怖と心配で涙が止まらなかった。「検査の結果を待つしかない」と主人なりの精一杯の言葉に、私の心は増々空中に浮いてしまった。母国にいれば知り合いの先生はいるし、せめてこの気持ちを父や兄にぶつけることができた。しかし日本に来て浅い私は、日本語での会話はやっとだったのに、医療専門用語となると、意味も分からず、質問は尚更できなかった。家族の反対に背いて日本に来た自分は今更父に迷惑をかけられない。その思いで私は不安を打ち明けず一人で悩んだ。

検査入院を待つある日、突然、広島に住む義父から電話があった。「3日間店を休むから島根に行こう」と言った。60代にして一人で魚屋を切り盛りしている義父の言葉に私はその訳を聞くと、「お客さんから聞いた。島根に名医がいる！見てもらうだけでどんな腫瘍もなくなる！」と義父の言葉に希望が満ちた。私は目に見えぬ「力」を信じる人間ではない。しかし義父の無鉄砲な話には私は疑問を持ちながらも心が救われた。「例え何かあってもお父さんがいるから大丈夫」と言ってくれた義父の言葉に私はその場で泣きそうになった。幸い入院はすぐ決まり、手術の結果、腫瘍は良性だった。島根には行かずに済んだ。「何かあってもお父さんがいる」と言った義父は今83歳。未だに魚屋で頑張る義父に、私も「何かあっても私達がいるから大丈夫」と心の中で応援している。

「米沢、その人情」 山形県 西川 良文

14年前、母の死と離婚で大きなダメージを受けた私は、人生の再スタートを新天地で始めたかった。折しも、東京に住む知人から「米沢で一人暮らしをしている親と一緒に住むことになったの。よかったら米沢の家を貸すよ。」と連絡があった。米沢といえば米沢牛くらいの知識しかなかったが、「外国じゃあるまいし、二人の息子と頑張るわ。」と周囲の反対をよそに大阪から越してきたのだった。

しかし、所変われば品変わる。気候風土は元より、言葉、習慣から暮らしの細部に至るまで大阪と大きく異なり、高をくくっていた私は途方にくれた。

だが、私にも意地がある。意地を支えに、上りの新幹線を溜息で見送り、慣れぬ手つきで雪かきをした。

米沢で迎えた師走のある日、職場でお雑煮の話になった。訊けば米沢では切り餅を使うという。大阪のお雑煮は丸餅だと話すと「米沢じゃ、丸餅は神様さお供えする餅だべ」ということだった。さすがに、お供え餅をお雑煮に使うのは気が引ける。ならば、切り餅を使えば良さそうなものだが、お雑煮は我が家の味として大阪風にしておきたかった。

年末休みの夕方、職場の人が大きなボウルを抱えてやってきた。何かと訝しんでいると、「これで作れっぺ？」と言って笑う。ボウルを覆うラップが外されると、白い湯気が勢いよく立ち上った。それは、自家製もち米のつきたて餅だった。降りしきる雪の中、冷めては丸め辛かろうと、ボウルを毛布でくるみ大急ぎで届けてくれたのだ。ずしりと重いボウルを抱きかかえるように受けとると、お腹にほかほかと温かかった。

以来、毎年末につきたて餅が届く。たとえ大雪であろうと変わることなく笑顔と一緒に届く。「子供は独立したんやから、そろそろ大阪へ帰ってきたら？」と心配する友人に私はためらう事なく答えている。終の棲家は米沢に決めていると。

「地域の絆」 埼玉県 武井 祐子

私の嫁いだ秩父市は山間の盆地に位置し、少子高齢化が急速に進む地域である。ご近所といえばほとんどがお年寄り世帯。私は仕事が忙しく、近所付き合いをしてこなかった。心寂しいが今のご時世しかたがない。しかし、私の考えを変えるある出来事が起こった。

息子が生まれ歩けるようになると、家の近くを散歩するのが日課となった。息子は大好きな自動車が止まっていると、私の制止を振り切り、誰の家であろうが構わず侵入する。そして自動車をじっくり観察して、笑う。

ある日息子が、いつものように人様の庭に不法侵入すると、突然、家の中からおじいさんが出てきた。私はすぐに謝ろうとすると、その人は笑って言った。

「いいんだよ。子どもなんだから。」

「勝手にすみません。車が好きなので…。」

「車が好きなのかあ。では、どうぞ。」

と、息子が満足するまで自動車を触らせてくれた。息子は大喜びだった。

秩父に珍しい大雪が降り、雪に不慣れな私はしばらく散歩に行けなかった。凍った雪が解けた頃出かけると、先日のおじいさんが、「久しぶりだね。はい、プレゼント。」と、息子にミニカーを渡してくれた。息子が自動車を好きだということを覚えていて、ミニカーを用意して待っていてくれたのだ。突然のことに驚いた。きっとお孫さんにも、そうしてきたのだろう。おじいさんの、孫を見つめるような優しい目が印象的だった。

私はこれをきっかけに、ご近所の方に話しかけるよう努めた。するとおじいさんだけでなく、様々な人と話が弾み、やがて子どもの成長を共に喜び、料理やお土産の交換さえも始まり、少しずつ地域に馴染んできた。昔は当たり前だった『ご近所付き合い』に、自分も息子も地域に育てていただいている。

息子とおじいさんの出会いが結んだ地域との絆。今では、ご近所の方に会えば自然と子育て相談が始まることも、私の日課となった。

「彼ら gave れたもの」 千葉県 高橋良宗

これは、私が昨年韓国の釜山^{プサン}へ行った時の事である。

博多発のフェリーが釜山港に着き、下船の為そろそろ客室を出ようかと思っていた時だった。

「すみません、アナタ、日本人ですか」

と、同じ客室の男性から声をかけられた。

「ええ、そうですけど…」

私は応じ、それをきっかけに互いの事を少し話した。男性はソウさんといい、自転車での日本横断の旅を終えて帰るところだという。そのソウさんが、私が今夜泊まる所が決まってないと知ると、自分と一緒に叔母の家に泊まらないか、と提案してきた。好奇心と不安の間で少し迷ったが、付いていくことにした。彼の、

「自分ハ日本デトテモ親切ニシテモライマシタ。ソノ恩返シミタイナモノデス」

という言葉に賭けてみる事にしたのだ。

しかし、いざ付いていくと不安が強くなってきた。地下鉄に一時間以上も揺られ、目的地の駅で降りて歩く。しばらくは営業中の飲食店や市場があって明るいのだが、そこを過ぎると、灯りの少ない静かな夜の町である。信じてよかったのか、断ってホテルを探すべきだったのではないか。そんな事を考えている内に、叔母さんの住むというマンションに着いた。エレベーターで昇っていく時、地面が遠くなっていくのが何だか心細かった。

ドアを開けた時、それまでの不安がひどく滑稽なものに思えた。蛍光灯が煌々と輝き、テーブルにはほかほかと湯気を立てている料理、ふっくらとした顔に微笑を浮かべて叔母さんが私を迎えてくれた。安心したのと同時に、空腹を覚えた。叔母さんの娘さんを加えた四人で楽しく食卓を囲んだ。それまでの数日間を簡単な食事ばかりで、そして今まで家族揃っての食事の記憶が無い私には、その時間が深く心身に染みた。

手元にある別れ際に撮った記念写真を見ると、彼らの笑顔と大切な時間を思い出す。